

21年11月7日

「正史研究と二次創作～全譯三國志から曹丕八十歳まで～」

佐藤大朗

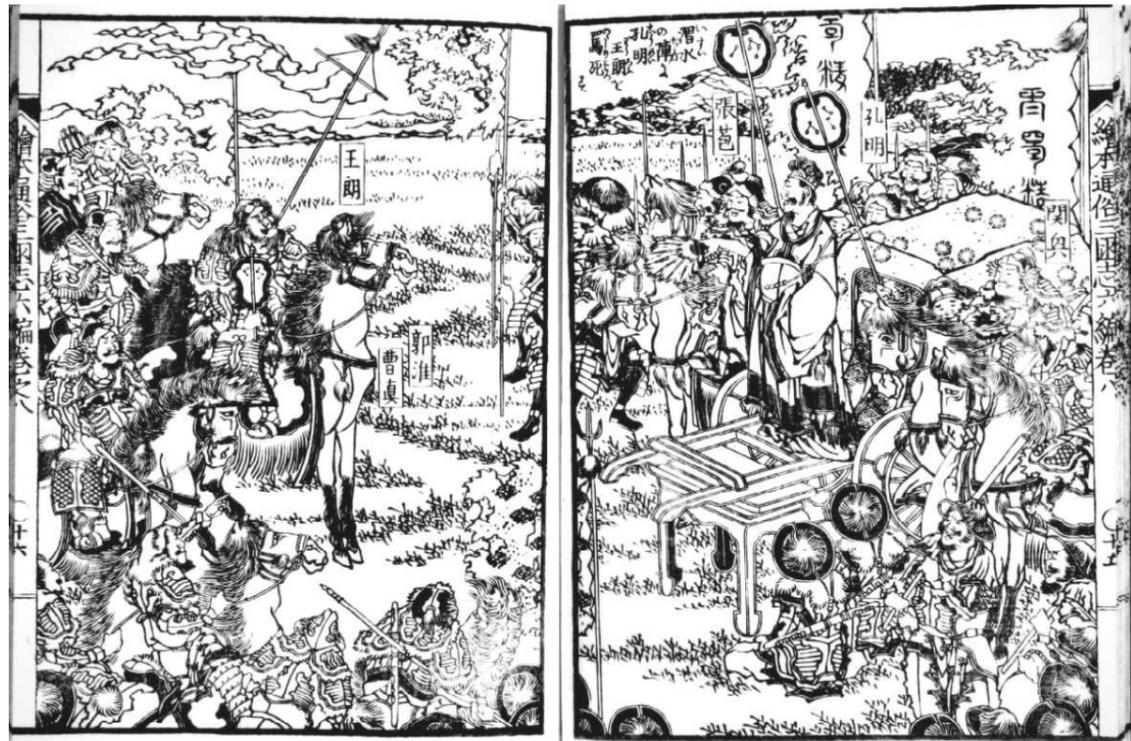
1. はじめに

三国志との出会いはさまざまです。小説、漫画、ゲーム、ドラマなど、入り口はいろいろあります。複数の作品に触れると、場面や人物の描かれ方が異なることに気づきます。たどっていくと、作品のあいだに影響・繋がりが見えてきます。歴史書にも繋がります。調べ尽くした後に、自分で創作やアレンジをするのも楽しいことです。

今回は、魏と蜀の正統性（皇帝となるべき根拠）について、諸葛亮（孔明）が、魏の王朗と言いつつ争ったシーンについて、見てみましょう。

絵本通俗三国志 初, 2-8編 / 池田東籬亭 校正 ; 葛飾戴斗 画図

早稲田大学図書館 https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he21/he21_00221/



2. 吉川英治『三国志』五丈原の巻 祁山の野

私が本格的に三国志にふれたのは、大学時代、吉川英治『三国志』でした。

魏軍の門旗は揺れうごいた。白髯の老翁、黒甲錦袖をまとい、徐々、馬をすすめて近づいてくる。すなわち七十六歳の軍師王朗である。

「孔明。わが一言を聞け……。桓帝、靈帝このかた、四海わかれて争い、群雄みな霸王を僭称す。ひとりわが太祖武帝、民をいつくしみ、六合をはらい清め、八荒を蕪のごとく捲いて、ついに大魏国を建つ。四方みなその徳を仰ぎ、今日にいたるは、これ權をもって取るに非ず、徳に帰し、天命の然らしめたところである。——然るに、汝の主、玄德はどうであったか」……

王朗が、魏帝の正しさを説く。曹操が天下の乱れを平定し、その功績＝徳によって天から命令を受け、皇帝となった。權勢・權謀術数で皇帝になったのではない。かたや玄德（劉備）は、功績＝徳がない（のではないか）。

冒頭、彼のまず説く所は、魏の正義であった。また、その魏を興した太祖曹操と、蜀の玄德とを比較して、その順逆を論破し、曹操が天下万邦の上に立ったのは、堯が舜に世をゆずった例と同じもので、天に応じ人に従ったものであるが、玄德にはその徳もないのかかわらず、◎ただ自ら漢朝の末裔だなどという系図だけを根拠として、詭計偽善をもつばらとして蜀の一隅を奪って今日を成したものに過ぎない。これは現下の中国の人心に徴しても明らかな批判である——というのであった。……

敵味方とも鳴りをしずめ、耳をかたむけていたが、特に、蜀の軍勢までが、道理のあることかな——と、声には出さぬが、嗟嘆してやまない容子であった。

心ある蜀の大將たちは、これは一大事だと思った。敵側の弁論に魅惑されて、蜀の三軍がこう感じ入っているような態では、たとえ戦いを開始しても勝てるわけではない。

吉川英治（昭和の日本人）が登場し、解説する。王朗の説く魏の正義は、「現下（三国時代？）の中国の人心」において、説得力がある。蜀軍ですら「嗟嘆」した。この危機を逆転すれば、孔明の智謀を描けるかも知れないが、蜀軍（劉備・孔明）の正義が揺らぐのは、物語として好ましくないのでは？

孔明は声を張った。……
「滔々、濁世のとき、予は若き傷心を抱き、襄陽の郊外に屈居して、時あらん日を天に信じ、黙々、書を読み、田を耕しつつあった……。天、孔明を世に出し給うは、天なお漢朝を捨て給わぬしである。われ今 勅を畏み、忠勇なるわが蜀兵と、生死をちこうてここ祁山の野に出たり。汝はこれ詔諛の老臣……。この野に死屍をさらし、なんの面目あって、黄泉の下、漢皇二十四帝にまみえるつもりであるか。退れ、老賊」……

諸葛亮の劉備に対する忠と、王朗の「漢皇二十四帝」に対する不忠を対比。魏と蜀の正しさから、孔明と王朗の生き方（忠の有無）に論点をすり替えた。

結論的には、漢朝に代るべく立った蜀朝廷と魏朝廷とのいずれが正しいかになるが、要

するに、その正統論だけでは、魏には魏の主張があり、蜀には蜀の論拠があつて、これは水掛け論に終るしかない。

で、孔明はもっぱら理念の争いを避けて衆の情念を衝いたのである。果たして、彼がことばを結ぶと、蜀の三軍は、わあっと、大呼を揚げてその弁論を支持し、また自己の感情を、彼の言説の上に加えた。……

吉川英治（及び彼が想定する日本人読者）にとって、魏と蜀の対立は、「水掛け論」である。孔明が正統論で王朗を論破できないことを作中で認めた上で、情念（人格攻撃と感情論）に切り替えたという。「正統論」の物語としての挫折。

当の王朗は、孔明の痛烈なことばに、血 激し、気 塞り、愧入るが如く、うつ向いていたと思われたが、そのうちに一声、うーむと呻くと、馬の上からまるび落ちて遂に、そのまま、息絶えてしまった。 → 矮小化による消化不良。調査したい！

3. 『三国志演義』毛宗崗本 第九十三回 立間祥介訳（徳間文庫）

吉川英治『三国志』は、中国の『三国志演義』に基づくと言われている。

王朗が馬を躍らせて進み出るや、孔明は車上に拱手し、王朗、馬上から会釈し、……「天数に変化あり、神器（帝位）あらたまって有徳の人に帰するのは、自然の理である。昔、桓・霊二帝以来、黄巾の賊 猖獗して天下を縦横し、……董卓 謀叛し……。かかる時、わが太祖武皇帝（曹操）は、天下を平定し、……万民 心を寄せ、天下の者 仰いで徳とせざる者はなかった。これは権勢をもって得たものではなく、実に天命の帰するところでござる……」★

孔明は車上でからからと笑った。

「……白髯頭の下郎。白髯の国賊。今日にもあの世に行つて、漢の二十四帝に会わせる顔もあるまい。老賊、さがりおろう。いざ勝負してくれん」

王朗これを聞き、胸ふさがって、一声喚くなり、馬から転げ落ちて死んだ。

後漢の桓帝・霊帝から、魏国の成り立ちを説く王朗に対し、個人攻撃で応酬する孔明は、『三国志演義』に由来する。しかし、毛宗崗本『三国志演義』に、蜀軍が王朗に感心したといった反応は見え、孔明が即座に笑い飛ばす。

吉川英治『三国志』の描く、王朗の説得力は、吉川英治の創作なのか。

4. 『三国志演義』李卓吾本 第九十三回

『三国志演義』は、通行本（中国で一般に読まれ、日本で現代語訳が出版されているもの）以外に、古い系統の本がある。李卓吾本という。違う部分を抜粋する。

……蜀兵は王朗の言葉を聞き、感歎して已まなかった。みな王朗に礼をなし、孔明は黙然として語らなかつた。

毛宗崗本より古い李卓吾本で、蜀兵が感歎し、孔明が黙る場面がある。王朗に感心する蜀軍というモチーフは、毛宗崗が物語の世界観にあわないとして、李卓吾本から削除したものであった。古い痕跡が、日本の三国志のスタンダードである吉川英治『三国志』に保存されている。

5. 『絵本通俗三国志』六篇 八（1ページ目の挿絵）

古いほうの李卓吾本『三国志演義』は、江戸時代に日本で翻訳されていた。『通俗三国志』という。挿絵が付けられ、『絵本通俗三国志』という。

『通俗三国志』には、李卓吾本と同じく、蜀軍が「嗟嘆」し、王朗の納得したという文がある。吉川英治『三国志』が『通俗三国志』を経由し、李卓吾本を継承していることは、研究で明らかにされている*1。

では、『三国志演義』にある諸葛亮と王朗の論争は、陳寿『三国志』（正史）に見える、いわゆる「史実」なのであろうか。蜀軍の反応は、記述があるのか。

6. 陳寿『三国志』卷十三 王朗伝

（王朗は）『易』『春秋』『孝経』『周官』の伝を著した。上奏や議論は、すべて世に伝えられた。太和二年に薨去し、諡して成侯とした。子の王肅が嗣いだ。

王朗の死因は記述がない。魏の太和二（二二八）年に亡くなったことだけが確認できる（諸葛亮の第一次北伐と同年）。『三国志演義』は、正史で同年に亡くなった人物に、死に場所を与えることがある。例：呂蒙
それでは、諸葛亮との論戦というモチーフは、どこから来たのか。

7. 陳寿『三国志』卷三十五 諸葛亮伝

建興元（二二三）年、諸葛亮に……丞相府を開いて国事を取り仕切らせた [一]。

裴松之注]

[一]『諸葛亮集』に、「この歳、魏の司徒の華歆・司空の王朗・尚書令の陳羣・太史令の許芝・謁者僕射の諸葛璋は、それぞれ書簡を諸葛亮に与え、天命と人事を述べ、

*1 袴田郁一「吉川英治『三国志』の原書とその文学性」（『三国志研究』八号、二〇一三年）を参照。

(蜀の)国をあげて(魏の)「藩」と称させようとした。諸葛亮はまったく返書を送らず、「正義」を作って次のように言った、「……道義を基に悪人を討伐する場合、(勝敗は兵の)多寡によらない。(曹操)孟徳に至っては、ごまかしの勝利による力により、数十万の軍勢を起し、張郃を陽平関に救おうとしたが、……漢中の地を失った。天下は勝手に奪うことができないことを深く知り、帰還して到着しないうちに、毒にあたって死んだ。(曹丕)子桓は度を越えた逸脱を行い、曹操を継承して(後漢を)篡奪した。……(蜀が)数十万の軍勢により、正道に基づき有罪の(魏)に臨むのである。わざわざ刃向かう連中など居るであろうか」とある。

魏の王朗らは、「天命と人事」を論じた。『三国志演義』の王朗とテーマが共通するが、文面が不明なので、『三国志演義』の台詞は繋がらない。諸葛亮は、「道義」のある蜀が勝利するのが当然とし、劉備が漢中を得たことを証左とした。

諸葛亮が、対話を拒んだ点(まったく返書を送らず)は、『三国志演義』と同じ。だが、『諸葛亮集』には人格攻撃が見られない。

『三国志演義』では、王朗が論破されて死ぬという結末が先にあり、台詞を補う必要があった。『諸葛亮集』を用いず、論点のすり替え、人格攻撃と感情論の台詞を創作した。諸葛亮の品位を高めているかは疑問。

8. 陳寿『三国志』卷二 文帝紀

『三国志演義』に見え、李卓吾本で蜀兵を感心させた王朗の台詞の由来は？
後漢の献帝が与えた、禅譲の詔がそれである。

「ああなんじ魏王よ、むかし帝堯は君位を虞舜に禅譲し、舜もまた(禅譲して)禹に(即位を)命じた。天命は不変のものではなく、ただ有徳の者に帰す。漢の政道は衰微し、代々その秩序を失い、降って朕の身に及ぶと、大乱が世を暗くし、群凶が恣に叛逆し、天下は転覆した。武王(曹操)の神武が、この危難を四方に救い、……九服(のすべて)がまことにその恩恵を受けたのである」

『三国志演義』★に対応する。王朗の台詞は、歴史書に基づき説得力がある。かたや、諸葛亮の台詞は、歴史書に基礎を持たず、結末ありきの創作であり、やや浅薄に感じられる。

魏の文帝(曹丕)は、即位の裏づけとして、儒教の経書『尚書』にみえる堯から舜への革命と、曹氏の天下平定の実績を準備した。

9. 二次創作のアイデア

孔明は蜀の正義を掲げて戦うが、討論シーンは台無しであった。蜀と魏の論戦を三国志ファンとしてはちゃんと見てみたい。

二二六年、曹丕は四十歳で崩御し、諸葛亮の北伐(二二八年)とすれ違った。もしも漢滅亡の「当事者」曹丕が生き残り、諸葛亮と直接対決したら……と妄想をしたい。

曹丕を長生きさせる「根拠」を歴史書に求める必要がある。

曹丕は、「寿命はどれほどか」と尋ねた。高元呂は、「四十歳になると小さな苦難がありますが、それを過ぎれば心配はないでしょう」と答えた。……四十歳で亡くなった(『三国志』卷二 注引『魏略』)。

朱建平は、「將軍(曹丕)の寿命は八十です。四十歳で小さな苦難がありますが、謹めば乗り越えられます」と言った(『三国志』卷二十九 方技 朱建平伝)。

10. 二次創作『曹丕八十歳』

吉川英治『三国志』において、諸葛亮は、論点をすり替え、個人攻撃・感情論に訴えた。曹丕を出陣させて(創作)、議論を噛み合わせ、魏に反撃の機会を与えた。

蜀の旌旗が見えた。王朗は外套をはらい、颯爽と乗馬すると、陣頭に出て、「孔明。わが一言を聞け」と呼びかけた。……「聖なる漢も、桓・霊のころに衰退し、董卓が天下を転覆させた。魏の武帝は秩序を回復し、新たな天命を受けられた。漢の天子はこれを祝福し、堯・舜にならって禅譲なされた」

王朗は、咳払いをして続けた。

「かたや劉備は、天下に何をしたか。群雄を攪乱し、戦禍を助長した。◎皇室の末裔と偽り、漢の天子を黙殺して、天子を僭称した。彼の偽善は受け継がれ、今日は今日とて、無知な将兵を欺いて動員し、関中を騒がしている」

『三国志演義』以上に、王朗が、陳寿『三国志』の禅譲の詔を踏まえる。

咳払いの後、◎王朗の劉備批判は、◎吉川英治の劉備批判のコピー。

敵味方を隔てず、みな息を潜めて耳を傾け、なるほどと感心した。蜀兵のなかには隊列を乱し、ふらふらと敵軍に吸い寄せられる者もいた。諸葛亮は沈黙した。

王朗の説を聞く蜀軍というモチーフは、李卓吾本『三国志演義』、『通俗三国志』、吉川英治『三国志』から継承。

諸葛亮は笑った。……「私は襄陽^{じょうよう}の郊外で、読書に明け暮れました。先帝が三度までも訪問され、仕官を許されました。先帝の徳は無窮^{むきゆう}です。先帝こそ聖漢の正統を継承される御方です」

「きみ一人の思い出話など聞いていない」

王朗は、まるで相手にならぬと撥ねつけた。諸葛亮は劣勢と悟るや、「退れっ、老賊」と罵倒した。

個人の半生を語る諸葛亮は、吉川英治『三国志』を継承。しかし、「思い出話など聞いていない」と退け、諸葛亮を「劣勢」と示すのは、独自アレンジ。

曹丕からも敬われる王朗は、中原で尊敬の眼差しだけを一身に浴びてきた。だしぬけに罵倒されるや、老いた頭脳に津波のような怒りが充満し、鼻から血飛沫を撒き散らして気を失った。

王朗の末路は、吉川英治『三国志』を継承。死因の合理化（自分に向けられる感情の落差、という理由をつけた）。

曹丕と王朗の関係は、陳寿『三国志』文帝紀に引く『魏書』に、「文帝は……かねてより敬っていた大理^{だいり}の王朗に書状を送って、「生きているとき七尺の肉体があっても、死ねば一棺の土となります。ただ徳を立てて名を揚げることで、（死後も）不朽となります……」という文がある。

いちばん驚いたのは、当の諸葛亮であったが、「老賊は、長年の過ちに気づいて、恥じ入って死んだ」と解釈を付けた。悠々と自軍にもどる諸葛亮を、

「待て」

という一喝が凍て付かせた。振り向けば、龍のように巨大な白馬の上で、黄金の冕冠をかぶった人物が、眉を吊り上げている。

「あ、あなたは？」

「曹子桓^{しかん}。天子だ。王司空は、朕の師友だった」凄絶な表情である。「これ以上、司空を侮辱したら、死罪に処す」

圧倒された諸葛亮は、劉備の臨終の床を思い出した。「君の才は曹丕に十倍する。必ず国を安んじ、大事^{だいじ}を定められる」と言ってくれた。彼の慈愛が懐かしい。三顧の礼で迎えてくれた主君であると同時に、優しい父のような存在でもあった。

陳寿『三国志』卷三十五 諸葛亮伝に、諸葛亮と曹丕を対比する文がある。

先主（劉備）は諸葛亮を成都から呼び、後事を託した。諸葛亮に、「君の才能は曹丕の十倍はある。必ず国家を安んじ、最後には（天下統一の）大事業をなしと

げよう。もし後継ぎ（劉禪）が補佐するに足れば、これを補佐せよ。もし才能がなければ、君が自ら（皇帝の位を）取るべきである」と。

劉備が諸葛亮に与えた評価は、当事者（曹丕）不在で行われた。実際に諸葛亮が、曹丕を前にしたら？という創作をした。

12. おわりに

はじめて吉川英治『三国志』を読んだとき、諸葛亮が舌鋒だけで敵の重鎮を憤死させることは、名場面として印象に残りました。ところが、議論の内容に物足りなさがありました。国家を論じる王朗に対し、感情論と個人攻撃でこたえる諸葛亮。魏と蜀の正統論を、「水掛け論」として退ける吉川英治……。

この違和感が動機となり、『三国志演義』には複数のバージョンがあること、日本では『三国志演義』の古いバージョン（李卓吾本）が江戸時代に翻訳され、昭和の吉川英治に繋がっていることを知りました。

『三国志演義』は、歴史書（陳寿『三国志』）に題材を取っています。歴史書を縦横無尽に読むことで、物語の成り立ちを分析でき、その経験が二次創作に繋がりました。三国志の楽しみ方の一例として、皆さまのヒントになりましたら幸いです。

以上

本日登場した書籍：通販サイト BASE

三国志独学ガイド —正史三国志のつぎに読む本—

3,000 円 + 送料



正史系シミュレーション小説 曹丕八十歳

2,500 円 + 送料

